

# 第33回しんわ美術展 講評

審査員 池田 良則

審査員 西田 真人

## 【総 評】

日本画52点、洋画206点、版画9点の応募総数267点から150点の入選としました。岡山県内の応募者は113人、県外からの応募数がそれを上まわり154人となりました。

昨年は、コロナ禍で中止を余儀なくされ、今年になっても第5波の影響により応募数が減少してしまいましたが、それでも数多くの出品があり、そして、さまざまな表現に富んだ質の高い作品ばかりで、さすがに全国公募のコンクールとして広く定着していると実感しました。

描かれている題材は多岐にわたり、技術的にもしっかりした作品が多いと思いました。

具象的傾向の作品が多かったのですが、細密描

写、大胆な色彩、筆使い、重い印象、軽やかな印象、だまし絵のような構成と多彩な表現で溢れていました。また抽象作品にも素晴らしい作品が見られました。

長年にわたり、岡山県北の地から、このコンクールを通じて文化発信を続けてこられた貴重な存在としての「津山しんわ文化財団」に敬意を表するとともに、今後も文化振興の一役を担われることを期待しております。

## 【各受賞作品評】

### <文部科学大臣賞>

#### ヤマモト 實 日本画 《天空の華》

黒箔を巧みに利用した渋い色調の中に深い精神性が内含され、重厚な静寂感を醸し出しています。虚実混交の画面にはほどほどの装飾感もあり華やかでもあります。

### <グランプリ>

#### 大西 隆夫 洋画 《光と影》

廃校の教室でしょうか。描写力の確かさが人の気配の無い空気感を上手く表現されています。観る人にコロナ禍の折の不安感をも感じさせる構成力も大きな効果となっています。

### <金 賞>

#### 今泉 心 洋画 《空》

昨年、今年と世界中を襲ったコロナ禍の不安感を、荒涼とした風景の中空に浮かぶ大きな岩でシュールな心の中のイメージで伝えようとされている様に感じます。的確な画力がそれを現実の様に感じさせます。

### <岡山県知事賞>

#### 的場 弘司 日本画 《野いばら讃歌》

下地にもみ紙など計画的な制作姿勢で、しっかりとした描写力が裏打ちされ、渋い色調ながら端正な静寂感に説得力のある画面を創り上げています。

### <銀 賞>

#### 寺崎 城介 洋画 《装飾絵画》

画題の通り、クリムトを思い出す様な人物表現です。真直ぐ正面を向いた女性の強い意志に髪の毛が蛇になるというメデューサの伝説が重なって観る者の脚を止めさせます。

### <銀 賞>

#### 中島 慎一 洋画 《風景 (2021-9.1)》

その題名から察すると、9月1日に描き上げられたのでしょうか。画面にあるPOST. 8-31はその前日、既に過去という事でしょうか。正方形の

画面を色面構成として大きく分割した中で段ボールや蜂で見せる巧みな描写力は、作品の説得力となっています。

<銀 賞>

古川 功晟 日本画 《玉響》

大胆な構成がハッとさせる新鮮味を持っています。渋い色調ながらダチョウのそれぞれの部位が持つ質感を的確に活かし白黒の対比も効果的です。

<銅 賞>

青木 養子 日本画 《存在する事の意味》

日本画らしい端正な表現で怪しい幻想の世界を表出しています。薊の葉を主観的に白く描き、その創り出す流れが画面の中で美しい効果を演出しています。

<銅 賞>

カノウ ジュン 版画 《I'm here. 07/19/2021》

経年変化で黄ばんだ紙の色調を主調色として活かし、標本のようにオダマキと蝶を巧みに構成することで、鑑賞者それぞれの過ぎ去った時間を回想させるような情感があります。

<銅 賞>

甲賀 保 洋画 《マスクXI-B》

今回は誰もが思ってもみなかった世界的なコロナウイルスの感染が絵を描く人にとっても大きなテーマになったのでしょうか。一種のルポルタージュ絵画かも判りません。この作品は直球でそれを訴えてきます。そういうインパクトを持っています。

<銅 賞>

児玉 泰 洋画 《風の通る街の景観 - 覚醒》

ポップな画面から伝わってくる空想の街の景観は、作者の心の中の風景でしょう。現実にはあり得ない風景はマグリットを思い起こさせます。

<銅 賞>

林 寿朗 洋画 《郁しき花舞う日》

絵を通して心の中の景色を表現しようとする作品が今年が多かった様に思いますが、バベルの塔の様な岩山？は何もかも行き詰まった文明を表しているのでしょうか。この作品もコロナ禍における不安感をイメージしている様に思えます。

<津山市長賞>

佐藤 功 洋画 《牡丹》

油絵で日本画的な効果を考えられたのでしょうか。装飾的でもあるのですが、現実的にはあり得ない色彩の牡丹の花卉が不思議な魅力になっています。

<真庭市長賞>

稲岡 篤 日本画 《町・陸》

フォルムの構成が巧みで、単なる構成だけでなく生活感のある人家と鳥居の組み合わせが不思議な趣を醸しています。日本画岩絵の具の物質感を活かして触覚的な効果も高めています。

<美作市長賞>

長瀬 佳子 洋画 《東風》

それこそ、そよ風を感じさせる気持ちのよい作品です。大きく取った空間も効果的ですし、全体を包むパステルカラーが観る人を心穏やかにしてくれます。

<山陽新聞津山支社長賞>

木口 郷史 洋画 《漁港》

画面の半分を漁網にして、左半分に奥行きと広がりを感じさせる漁港を見せるという絵の構成をよく知っておられる方でしょう。大きく分けられた色の配分やナイフの使い方にも手慣れたベテランの技を感じさせる作品です。

<津山朝日新聞社長賞>

草加 明良 洋画 《広兼邸》

石垣の上にある旧家なののでしょうか。ペインティングナイフを使った油絵独特のテクニックで、現実には在る邸宅を心の中のイメージとして再表現され、ナイフ描法の力強さが魅力となっている作品です。

<奨励賞>

内海 福溥 日本画 《鳥の歌》

動きのある描写が大胆ながら的確で洒落た画面構成を作っています。色々と下地に施された技術も手馴れていて高度な技術力を持っておられます。

<奨励賞>

北川 直枝 洋画 《いのち》

いのち、命という題が付いていますが、巨木が持つ生命力に魅力を感じられて作品にされたのだと思います。巨樹や自然に対する畏怖の念を常々持つておられるのではないのでしょうか。巨樹や巨岩には人間本来の自然を尊ぶ心、神が宿ると感じた古代人にも共通したものを感じざるを得ません。

<奨励賞>

久保 佐栄子 日本画 《夜想》

日本画の工芸的なテクニックを有効に活かし、全体的に装飾的な趣の中、静かな華やかさがあり題名通りの夢想を感じさせてくれます。

<奨励賞>

小林 隆之 洋画 《花と少女（明日への肖像）》

近年の油絵にはイラストレーションに近い表現が増えて来ましたが、この作者は背景や構成に卓越したテクニックをお持ちです。正方形の画面を巧みに使って絵としての魅力を高めておられます。

<奨励賞>

佐伯 栄治 洋画 《椿》

変形の画面を使って横一列に椿の花を並べたすっきりした静物画に共感を覚えます。必要最小限の空間にピタッと椿の花が納まっています。

<奨励賞>

坂井 優子 日本画 《ひととき》

人物は静かなけだるさの中にあるように見えますが、画面上の白と青の色彩の対比がシャープで緊張感を醸しています。画面右下の文字の配置が人物の持つスマートフォンと連動し画面の効果としても面白い効果を持ってい

ます。

<奨励賞>

佐田 涼香 洋画 《サマー・ショット》

画面を大きく取り囲んでいるのは浮き輪？夏の思い出なののでしょうか、子供時代の思い出なののでしょうか。窓の外の夏の光と相まって一つのノスタルジックな風景を作っています。

<奨励賞>

澤田 浩明 洋画 《零(ゼロ)の風景》

数少ない色数と抑制されたモチーフで一つの画面上に物語を作っておられ、作者のこういう作品にしようというイメージと観る者のイメージが共感を呼ぶ様な作品です。絵を描くという事は、いかにイマジネーションというものが大事なのかと思い出す作品です。

<奨励賞>

J・トーサキ 洋画 《風籟》

大胆な画面構成と色面構成が魅力の作品です。抽象画と言っても良いと思いますが、じっくり観ていると卓上静物にも或いは風景画にも見えてきます。観る人のイマジネーションをかき立てる画面となっています。

<奨励賞>

島田 勝 洋画 《玄武郎》

抽象画と見るべきでしょうか、ポップな要素とイラストレーショナルな要素に作者のイマジネーションが重なって、色のインパクトで見せる作品となっています。こういう作品の解釈は観る人に任せられるものですが、貴方は何を感じるでしょうか。

<奨励賞>

田辺 治通 版画 《CLOUD SUMMER》

伝統的な木版画の技法ですがモダンな画面となっています。主調色の白と青の中、雲の灰色の諧調が適切で、垂直に画面を分割する船の構造物に少量の赤、黄、緑の色彩が華やぎも演出しています。

<奨励賞>

中森 順一 洋画 《浮遊》

非現実的な空間を現実であるかの様に感じさせる不思議な魅力を持った作品です。夢の中で見た様なデジャブでもある様な描写力があってこそ出来る作品が、仮想空間を作っています。

<奨励賞>

野崎 美佐代 日本画 《晩夏》

日本画の装飾感で華やかな空気感を巧みに表現しています。多彩な色彩ながら中央の美しい女性をオーケストラの指揮者のように画面をまとめています。

<奨励賞>

山本 周 洋画 《無限》

私は画題から作者が何を伝えようとしているのかを探る事がよくあるのですが、無限というのはこの四人の若者にとって何を指しているのか、握り合った手が人のつながりを現わしているのか、友情なのか連帯なのか、描写力のあるテクニシャンだけに絵の前に立って暫く考えてしまいました。

<奨励賞>

小珠 極禾 洋画 《見つめる》

今回は正面向きの女性像が多く見られますが、大変オーソドックスな描き方で、てらいも無く素直に観られる作品です。画中の女性と画面を通して対話できそうな気さえ致します。